

25年たってわかったこと — 宇佐見太市先生のご退職に際して —

学部長・研究科長
竹内 理

宇佐見太市先生が、この3月に特別契約教授の任期も終えられ、関西大学からご退職になる。寂寥の感が否めない。先生とは、今から25年前、総合情報学部の黎明期に同僚教員としてお会いして以来のお付き合いになる。同学部開設時に、予定していた教授が1名欠員となったため、当時文学部英文学科教授であった先生に白羽の矢が立って移籍となったと聞いている。この人事のおかげで、私はこの後、四半世紀にわたり深くお付き合いさせていただく宇佐見先生に、初めてお会いする機会を得たわけだ。

今でこそ、岩崎記念館の学部長室の窓をあけて、ロミオとジュリエットよろしく（残念ながらまったく美しくないのだが）、立ち話をしているような間柄ではあるが、私たち二人の関係性は決して平坦なものではなかった。時に信じるものが違い、また時に向かう方向があわず、何度も緊張関係を迎えたことがあった。しかし、不思議なことに、どんな場合でもお互いを尊敬し、コミュニケーションを密にとり、陰で悪口を言わない関係を続けることができた。もっと言えば、宇佐見先生の決して嘘をつかない高潔な性格に、私が一方的に救われたといった方が正解かもしれない。考えの合わない相手とはコミュニケーションを絶ち、陰で罵詈雑言を浴びせ、なおかつ足を引っ張る人もいるなか、先生は常にコミュニケーションのチャンネルをオープンにして、とことん私のような若輩者（当時は若かったのです）とも、それこそ口角泡を飛ばしながら、議論をしてくださった。こんな先輩は得がたいものである。「話せば話すほど誤解が生まれる」と言う人もいる。しかし、私が決してそう思わないのは宇佐見先生のお陰である。

その後、総合情報学部は完成年度を迎え、先生は古巣に戻られた。しかし、ほんの数年後には、外国語教育研究機構の設立メンバーの一員として、再び仕事をご一緒することになった。関大史上初めて学部を持たない教員組織を立ち上げることになったため、大変な難事業となった。様々な雑音も聞こえてきたと思う。軋轢も多々あったであろう。しかし先生は、それを機構長代理（今でいう副学部長）、そして機構長として見事に成し遂げられた。その後、大学院の設置となったが、これまた関大史上例を見ない独立研究科（学部を持たない研究科）の設置となったため、大波・小波の連続だった。この際、先生は、制度設計から設置趣意書の執筆まで、多くの作業を信頼して私に任せて下さった。決して同じ考え方や方向性ではなかったと思うが、それでも元気な若者（これも当時）として私を強力に支援いただき、その考え方や方針に時に

反対し、時に不満を漏らされながらも、常に外圧からの防波堤の役割を果たしてくださった。設置認可審査で、博士課程前期(修士)課程・博士課程後期(博士)課程の同時申請という難業に一発合格という大きな成果を上げることができたのも、まさにこの後押しがあったのだと思う。

総合情報学部に始まり、実に3度の新しい組織の立ち上げにご一緒させていただいて、もう次はないだろうと思ったのだが、4度目の正直。今度は外国語学部の設置作業をご一緒させていただくこととなった。全学の外国語教育を担当しながらの(いわば教養部の一部を持ちながらの)新設学部となると、ハードルは途方もなく高いものであった。この過程で、関係者達は何度も激しくぶつかり合い、そして反目もした。それでも決裂せずに作業を進めていくことができたのは、中心となった宇佐見先生のお人柄とリーダーシップ、そしてレジリエンスの高さが大きく寄与していたのだと、いまさらながらに思う。

宇佐見先生を評して、常に動き常に話すディケンズ作品の人物のようである、と言われた方がおられた。なるほど。しかし、先生は単なる「しゃべり」や「いらち」(大阪弁で失礼)ではない。その背後には、かなりしたたかな戦略的な選択があり、自分の考えを現実に合わせていく柔軟な適応力があつた。だからこそ、「いつまでも自分の考えに固執している奴はあかん」「勉強している人間が最後が一番強い」「時間がかかっても丁寧にすりあわせていかな」「聞いてないって言わせたらあかんで」「みんなを幸せにせな」(すべて大阪弁です)と珠玉の助言を(頼りない)私に与え続けてくださったのだと思う。結局、一見すると反りが合わないように見えた二人は、出会いから先生のご退職の日まで25年間、こうやって幾つもの共通の目標に向かって歩み続けたわけだ。そうだ、二人は反りが合わないのではない、合っていたのだ。そう思うと、先生のご退職に際して、涙腺が緩まないわけがない。